紀　　要

第 16 号

2003. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

甲賀寺雑考(続々)

畑中　英二

1．はじめに

甲賀寺は聖武天皇の発願により東大寺に先立って廬舎那仏を造像した寺院として、広く知られている。ただし、本格的な発掘調査が行われていないこともあってか、その知名度に比して具体像が明らかではない。そこで、伽藍の測量調査(畑中2001)や、出土瓦の検討(畑中2002)を行い、幾つかの新たな知見を得ることが出来た。それらの成果をふまえて紫香楽宮全体について取り扱った論考も出されている(栄原2002)。全容解明にはほど遠く新たな問題点が発生している状態ではあるが、かつての曖昧模糊とした状況からは脱しつつある。発掘調査に拠らず甲賀寺の問題点を明らかにする術は多いとはいえないが、未だ幾つかの課題が残されている。

本稿では、その一つである伝甲賀寺(鍛冶屋敷遺跡)出土坩堝について検討を加えてみたい。地元信楽の収集者をはじめとして滋賀県琵琶湖文化館・滋賀県窯業試験場は、甲賀寺の大仏造営の際に用いられたと言われる伝甲賀寺(鍛冶屋敷遺跡)出土とされる大型の坩堝を所有されている。確かに大型の坩堝であるから、甲賀寺で作られた（とされる）大仏の鋳造に用いられたと説明されれば頷けなくもない。地元では甲賀寺において巨大な仏像がつくられていたことの根拠の一つに、この坩堝の存在を指摘されている。坩堝の所有者は、これらの出土地については、「紫香楽宮址(甲賀寺)の北側」であるとしており、埋蔵文化財包蔵地としての鍛冶屋敷遺跡の範囲内に当たることは明らかである。ただし、筆者の聞き取りによると、この坩堝を鍛冶屋敷遺跡の範囲内で掘り出したという確実な情報は寡聞にしてしらない。なお、鍛冶屋敷遺跡については、昭和5(1930)年に肥後和男氏により甲賀寺が調査された際にも「第三節　鍛冶屋敷」として節を立てて、「表土を七八寸めくると焼土の層がありその間から鉱滓及金属を鎔融する際に生じたような遺物が出る」とし、「甲賀宮時代のものとも考へ得られる」として留意されている(肥後1931)。ただし、何故かその際にはこの坩堝の存在にはふれられていない。

果たして、この坩堝は甲賀寺の大仏造営の際に用いられたものなのであろうか。検討を加えてみよう。あわせて、甲賀寺の造営過程の問題点についてもふれることとする。

2．伝甲賀寺(鍛冶屋敷遺跡)出土坩堝について

(1)　伝甲賀寺(鍛冶屋敷遺跡)出土坩堝の概要

筆者の知る限りにおいては、伝甲賀寺(鍛冶屋敷遺跡)出土坩堝は10点程度がみられる。何れも完形品である。口径20㎝程度、器高30～40㎝で、筒状を呈する。肩の位置には円孔が穿たれており、粘土で閉塞されていることもある。内面には銅(？)が付着しており、外面は黒色もしくは赤紫色に発色する。底部は木炭を噛んでいることから、縦置きで用いられたことが判る。

図1　関係遺跡位置図

図２　梅干壺使用方法「鼓銅図録」より

形状や痕跡から坩堝に用いられたことは間違いなかろう。しかし、１箇所の遺跡から10個体(以上)の坩堝が破損すること無く、完形品で出土することがあるのだろうか。やや不自然な感を受ける。出土状況について検証することは困難であることから、この坩堝自体を検討の対象としてみよう。

⑵　伝甲賀寺出土(鍛治屋敷遺跡)坩堝の問題点

日本列島における坩堝について概観することにより、伝甲賀寺(鍛治屋敷遺跡)出土坩堝を位置づけてみよう。

甲賀寺の造営された奈良時代において最も一般的であったのは半球形の坩堝である。坩堝専用に作られたものもあるが、土器類を打ち欠くなどして転用したものもみられる。ただし、口径20cm未満、器高10cm未満であるから大型品の鋳造には不向きである。では、大型品の鋳造については如何なる坩堝が用いられていたのだろうか。東大寺における大仏造営の際にも坩堝は用いられていなかったようであり、現時点では同様の出土品は見あたらない。梵鐘の鋳造においてもこの種の坩堝が伴う事例はない。この様な形態の坩堝が奈良時代のものと仮定した場合、極めて一般的ではないものであったことが判るのだ。

では、この様な坩堝は何時から見られるようになるのだろうか。葉賀七三男氏によると、16世紀後半から真鍮製金属具生産の中心地となった京都において専ら用いられたのが梅干壺と呼称される大型の坩堝であるという(葉賀1990)。その内、木炭の放射性炭素年代測定を行ったものについては1600～1700年代に使用されたものであることが判っている。実は、諸々の特徴からこの梅干壺こそが、伝甲賀寺(鍛治屋敷遺跡)出土坩堝に酷似するのである。

甲賀寺の近隣に、真鍮を始めとする非鉄金属生産従事者の篤い信仰を集める広徳寺という寺院があり、かつて同様の坩堝が寺宝として所蔵されていたようである(葉賀1990)。どの様な経緯で「伝甲賀寺」とされたかについては本稿の主旨とは異なることから不問にしておきたいが、これらの坩堝は16世紀後半以降の所産であり、全てが完形品であることも考え併せると、出土品ではない可能性が極めて高いこととなる。甲賀寺において巨大な仏像が作られたと考えられているが故に、大型の坩堝が用いられたのだと考えられるに至ったのではなかろうか。

３．鍛治屋敷遺跡における調査の概要

先にもふれたように鍛治屋敷遺跡は、昭和５年の肥後氏による甲賀寺の調査の際にも注目されている。その際には、「一貫匁余あり鉄滓とも見えないから銅滓かもしれない」ものが出土したとあるが、現状では見ることが出来ないので如何なるものであったかは不明である。平成12年度には第二名神高速道路建設に先立って試掘調査を実施しており、銅の溶解炉・掘立柱建物を検出し、炉壁・銅の湯玉・土器・瓦といった遺物が出土している。銅の鋳造が行われていたことが判明した。平成14年度には、先に試掘調査を行った地点の発掘調査を実施し、遺存状態の良好な奈良時代中頃の溶解炉・鋳込み土坑・送風施設および関連施設を検出し、炉壁・銅の湯玉・鋳型等の鋳造関係遺物が多量に出土している。調査終了直後であるが、判明している事実関係についてふれておこう。なお、出土遺物の中には、トリベや坩堝はみられない。このことは大型品の鋳造が行われたことを示唆している。

遺構は層位関係から大きく３段階に分けることが出来る。第１段階は大型掘立柱建物が建てられてい

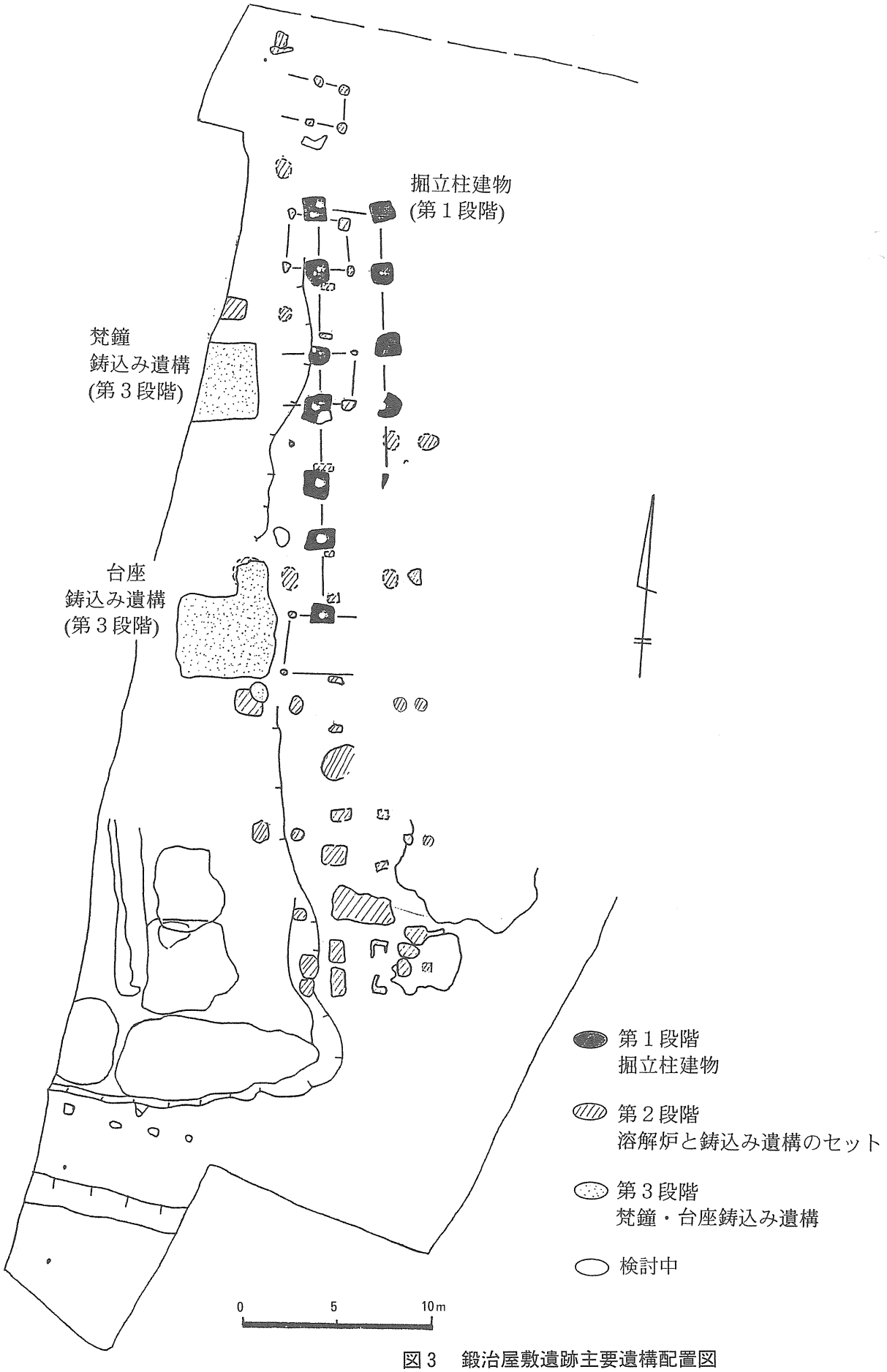
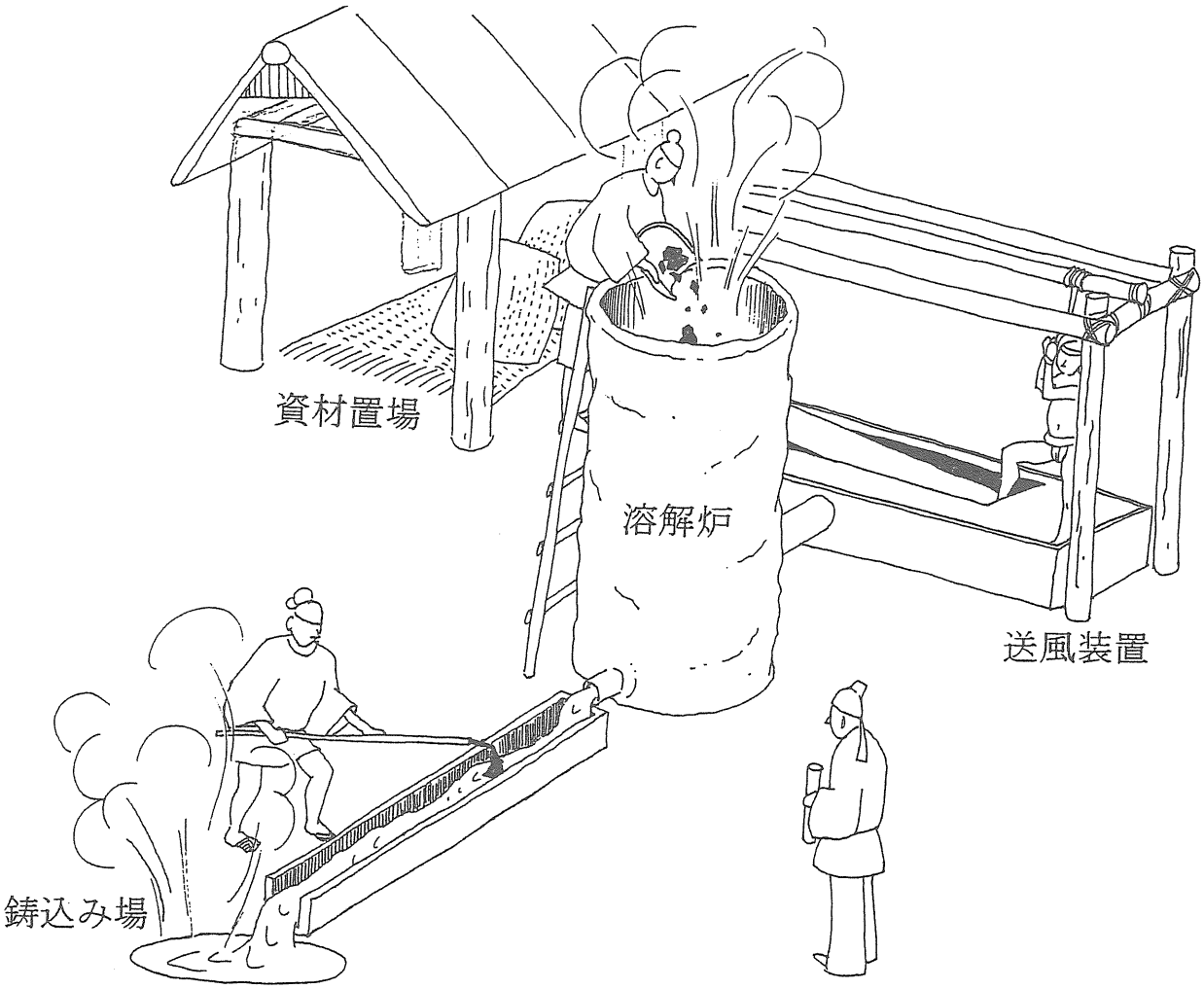


図３　鍛治屋敷遺跡主要遺構配置図



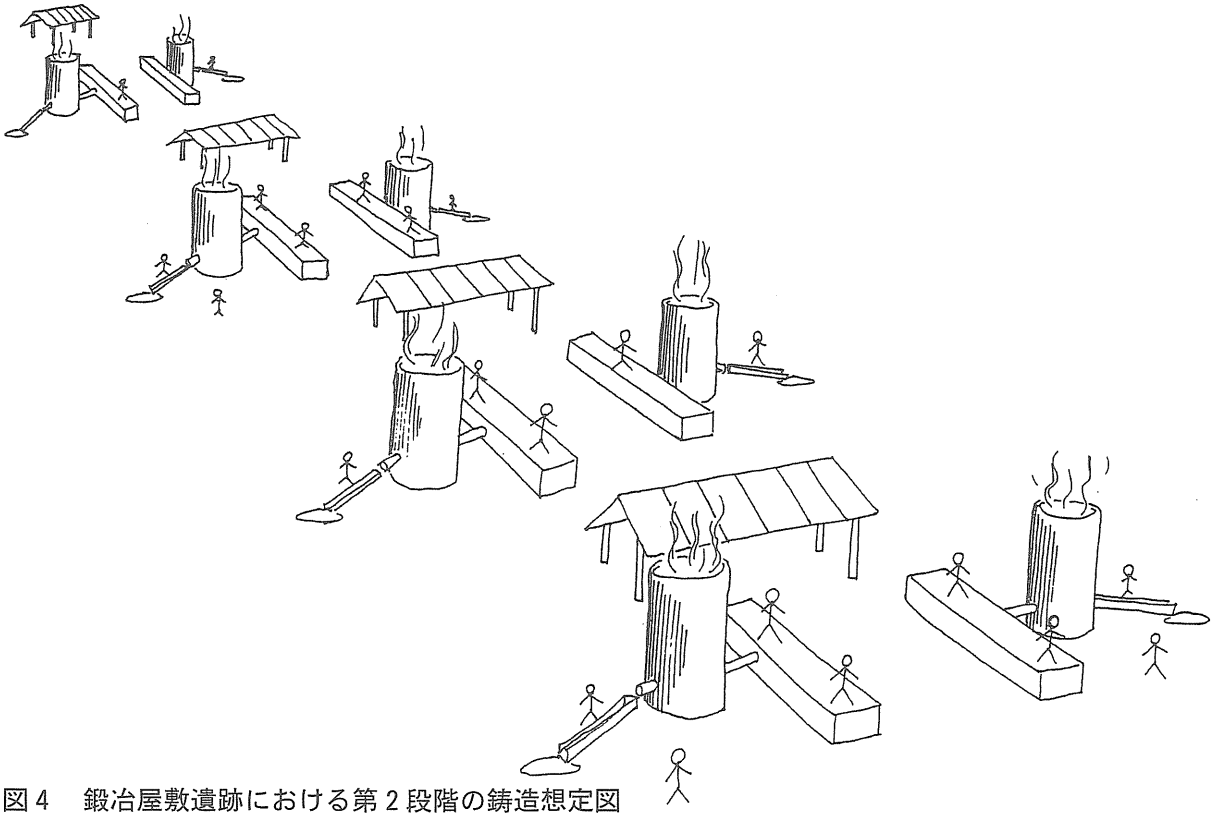


図４　鍛冶屋敷遺跡における第２段階の鋳造想定図

るが、関連する遺構は明らかではない。第2段階は大型掘立柱建物を盛り土で覆い尽くして溶解炉・送風施設・鋳込み遺構のユニットが整然と配置されている。これは、南北に約7m、東西に約1.5m間隔で配され、西側列は8ユニット、東側列は5ユニット確認できる。製品の具体的な形状は明らかではないが、多様な形態の鋳込み遺構の在り方から多様な形態の大型銅製品を鋳造していたとみられる。なお、溶解炉の形状については幾つかのバリエーションがみられ、幾つかの技術系統が混在していたとみられる。第3段階は、第2段階の遺構を破壊して、台座・梵鐘といった大型の鋳造施設が設けられる。

第1段階に伴う遺物は無いが、第2・3段階に伴う遺物は8世紀中頃の土器類がみられる。これらの土器類は、陶邑や東海地方のものが主体を占めており平城京経由で持ち込まれたものと考えられる。このことから、紫香楽宮が機能していた期間に設けられた鋳造工房であったとみてよいだろう。なお、第1段階の大型掘立柱建物は、出土遺物に恵まれないことから時期について推定することは困難であるが、この様な大型の建物を紫香楽宮以前に造営する理由が見あたらないことから、紫香楽宮の機能していた時期にあてることは可能であろう。巨視的には紫香楽宮の機能していた時期に稼働していた工房であることは明らかであるが、厳密には聖武天皇が紫香楽に居た時にあたるのか否かは明らかではない。後述するように甲賀寺そのものの評価如何によって、鍛冶屋敷遺跡での鋳造工房の時代背景が異なることにもなるのだ。甲賀寺周辺の調査結果を待って、改めて論じる必要があるだろう。

以上のように、大規模な鋳造工房の存在が明らかになったのであるが、先にふれた伝甲賀寺(鍛冶屋敷遺跡)出土坩堝と同様のものはみられない。

4．甲賀寺の造営過程の問題点

文献からうかがわれる甲賀寺は、考古資料からみると明らかではない点が非常に多い。そこで文献史料からうかがわれる甲賀寺の造営過程について考古資料を参照しつつ問題点を挙げることとしよう。

(1)　大仏造顕の詔

まず、『続日本紀』天平15年10月15日の「大仏造顕の詔」がある。「朕以薄徳、恭承大位、志存兼済、勤撫人物」からはじまり、「発菩薩大願、奉造盧舎那仏金銅像一躯。尽国銅而鎔象、削大山以構堂」というように、国中の銅を尽くして金銅像を鋳造して、大きな山を削って仏堂を構え(巨大な？)盧舎那仏の金銅像を作ろうとする宣言である。ただし、現状で伽藍の位置する内裏野丘陵は極めてなだらかであり「削大山」といったことも窺われず、金堂の規模からは「尽国銅」という程のことも窺われない。あくまでも詔の文字上のことであり現実とは異なるのか、甲賀寺とされる伽藍がこの記事とは全く別のものであるのかが問題となる。ただ、詔に「大山」とあることから丘陵上に寺院が位置したとすると、平坦面を備えている丘陵は、信楽町北部においては内裏野丘陵をおいて他にないことから、舞台は自ずと限定できるだろう。

(2)　寺地を開く

同年同月19日には「為奉造盧舎那仏像、始開寺地」とあり甲賀寺の寺地が開かれる(『続紀』)。紫香楽宮で出されたものであるとされ、甲賀寺での仏像作りを示すものであるという見解が一般的である。では、ここで開かれた寺地とは何処を指すのであろうか。現在みられる伽藍は東西南北約1.0kmの内裏野丘陵頂部の南端に位置し、比較的傾斜の強い南縁を登ると金堂院中門と塔院中門に至る。そこから僧院北端までの東西約100m南北約120mは平坦面が確保されている。ただし、そこから北側は南から北へと下る緩斜面となり、「寺地を開く」といった大規模整地が行われた痕跡を積極的に見出すことは困難である。更に丘陵北端については既に開墾や土取りされており、地形の改変が著しく旧状を推測することは困難である。つまり、北端部に若干の可能性を残しつつも、現況で見る限りでは寺地として開かれたと想定できる範囲は現在の伽藍の位置する約150m四方と考えるのが穏当だろう。とすると、東大寺級の盧舎那仏を製作したと仮定した場合、東西幅約90m弱に復元される金堂(大仏殿)のみは辛うじておさまるとしても、その他の堂舎を建てる余地が無くなってしまう。巨大な仏像製作の為に寺地を開いたのであって、他の堂舎建設の為の整地は未着手であったと考えるべきなのであろうか。その場合、現在みら

れる伽藍はあくまでも聖武天皇の平城還都後のものであり、その下層に天平15年に開かれた寺地が眠っているということになろう。ただし、現在みられる伽藍が当初のものあるとする考え方を全否定する材料もここでは見あたらないことから、他の要素と併せて検討する必要があるだろう。

なお、伽藍の測量調査を実施したところ、金堂院と東に位置する塔院は50尺方眼で割り付けられているが、講堂を中心とする僧院とは割付けに不整合が生じていることが判明した。金堂院・塔院と僧院の間には施工時期差があるのかもしれない。また、礎石は確認できないが、金堂院の西側に塔院と同規模の平坦地がみられることから、本来は金堂院西側に塔院を設ける予定があったのかもしれず、当初計画(整地)と現実の施工との間に変更(規模縮小)がうかがわれる。つまり、全体の整地作業の後、金堂院と塔院を造営する際に計画変更(規模縮小)があり、僧院の造営はそれらよりも後出する可能性を想定することが出来るのである。ただし、これらの土木作業が何時行われたかを推測する資料に乏しいことから、この問題については不問とせざるを得ない。

ともあれ、これらの礎石は昭和38年から開始された整備の際に置き直されていることから、厳密には本来の位置とは異なるものであるが、概ねの位置は狂っていないと思われる。ただ、発掘調査を実施することにより礎石の正位置の確認を行い、再度測量を実施する必要がある。

(3) 「体骨柱」を建てる

『続日本紀』天平16年11月13日に「体骨柱」の記事がある。「甲賀寺始建盧舎那仏体骨柱。天皇親臨手引其縄」とあり、盧舎那仏の骨柱を建てる際に聖武天皇自ら綱を引いたというものである。天平15年10月15日の詔からみると金銅仏を作ろうとしたと解釈され、鋳造仏を作る際の塑像の芯柱(と思われるもの)を建てたものとみられる。他に例のない「体骨柱」という文言から、東大寺の盧舎那仏の様に想像を絶する巨大な像をつくるための芯柱であると想定されるのが一般的である。ただし、他に「体骨柱」という文言が見あたらないことから、比較の対象が無く、如何なるものであったかを推測する手立てはない。以上のことから甲賀寺で作られようとした盧舎那仏の規模はさておき、「体骨柱」はどこに建てられたかが問題となる。先に天平15年に寺地を開いた場所についてふれたが、移送不可能な東大寺級の盧舎那仏を製作したとすると、内裏野丘陵上に限った場合は現在の伽藍の周辺に限定される。つまり、現在の伽藍の下層に位置していた可能性が最も高いこととなる。一方、移送可能な規模の盧舎那仏を製作しようとした場合は、必ずしも内裏野丘陵上に限定する必要はない。場所はあきらかではないが「造仏所」において「体骨柱」を建てる儀礼が執り行われたこととなろう。

「体骨柱」が如何なるものであったのかを明らかにすることが急務となろう。

(4) 国中連公麻呂の特進

天平17年4月25日に、紫香楽において国中連公麻呂が七位下から従五位下に特進する。公麻呂の職掌が何であったのか、公麻呂が何によって特進したのか、といったことについては必ずしも明らかにされているわけではない。しかし、後に造東大寺司において仏像製作に関する重責を担っていることから勘案すると、甲賀寺における仏像製作との関わりを想定できる。つまり、この特進は鋳造仏の塑像原型の完成と解釈されることが一般的なのである。

東大寺の場合、天平17年8月23日に整地が開始(?)され、同19年9月29日には盧舎那仏仏身の鋳造が開始されているから、約2年を経て整地と塑像原型の製作が完了したこととなる。天平18年10月6日の盧舎那仏への燃燈供養があるが、これは必ずしも製作途中の盧舎那仏塑像への供養ではなく、当時存在したとされる銀の盧舎那仏へのものであった可能性は否めない(堀池1955)。ただ、鋳造の為の諸準備があることから天平19年9月までには塑像原型は完成していたはずである。また、天平17年の整地は、聖武天皇が土壇作りに参加したとあるが、それよりもかなり前から整地は行われていたことになるという指摘(前田1986)があり、約2ヶ年以内の期間をかけて塑像原型の製作と鋳造のための準備が行われたと考えることも出来るだろう。確たる根拠はないが、盧舎那仏への燃燈供養の頃までには塑像原型は完成していたとする見方があり、東大寺盧舎那仏の塑像原型作りは約1年強程度の期間を要する作業であった

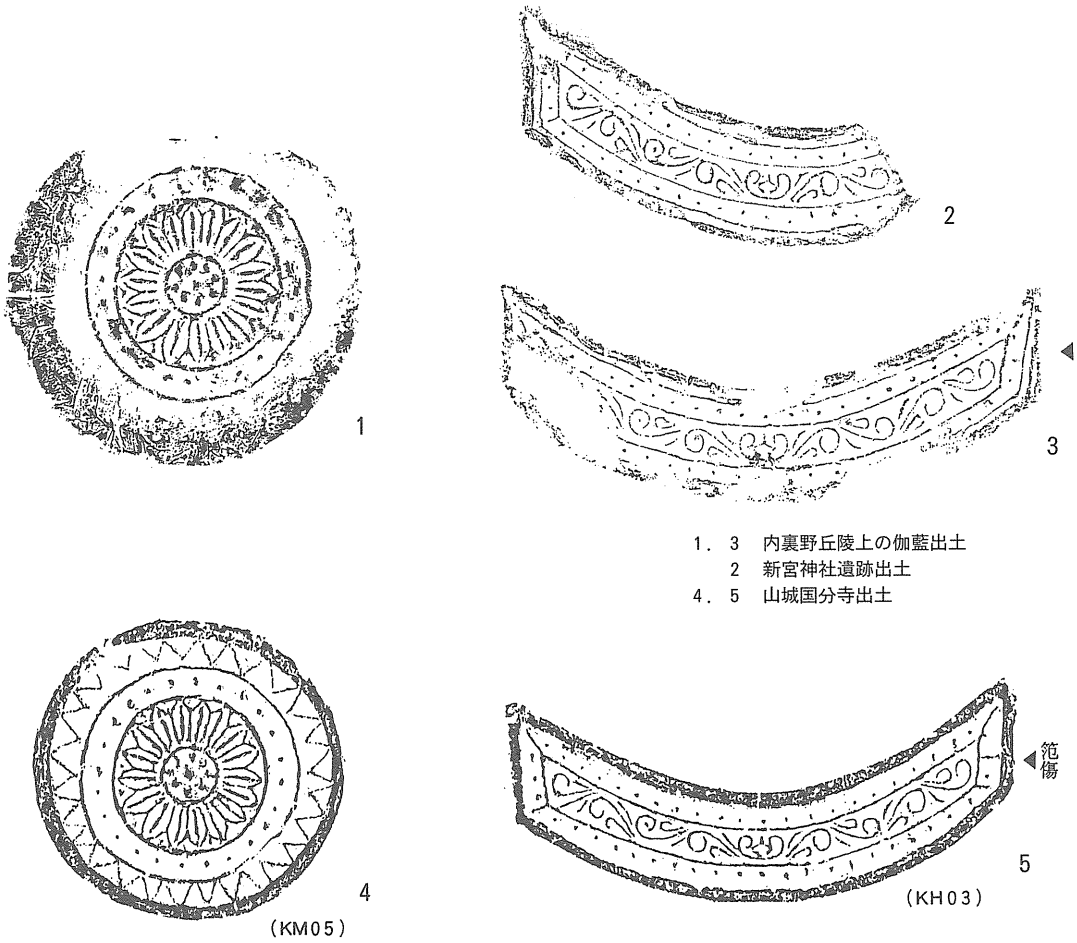


図5　軒瓦の笵傷の進行

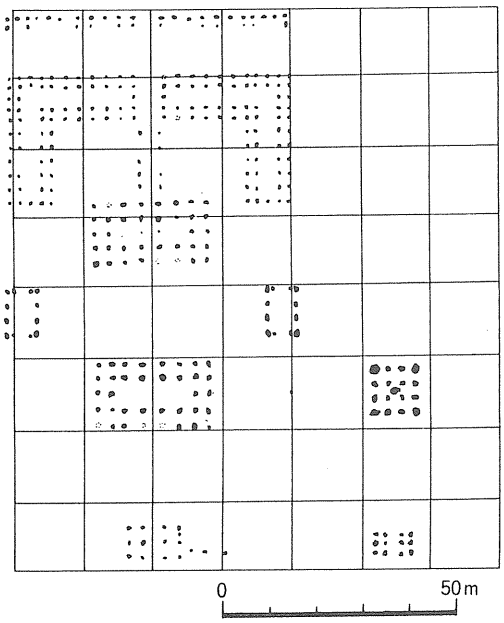


図7　内裏野丘陵上の伽藍配置図

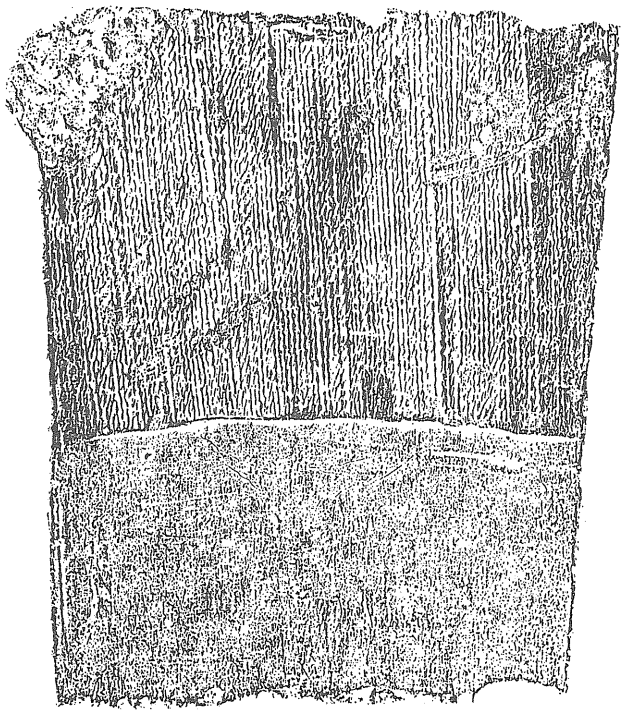


図6　恭仁宮大極殿平瓦D類

と推測する事も可能であろう。

さて、「体骨柱」が如何なるものであったのかはさておき、天平16年11月に建て(始め)られた塑像原型が翌年4月25日までに完成したこととなる。「体骨柱」が芯柱であった場合、塑像は僅か5ヶ月以内で出来上がったことになり、東大寺のそれよりも規模が小さかった可能性を想定することができる。一方で、「体骨柱」が芯柱ではなく塑像原型に近いものであった場合、天平15年10月に寺地を開く整地作業を開始してから天平16年11月までの約1年1ヶ月で整地と塑像原型に近いものの製作が完了し、更に約5ヶ月以内の期間でほぼ完成にこぎつけたこととなる。つまり、東大寺での作業期間と概ね合致するとみてよく、東大寺盧舎那仏級の規模の仏像製作が行われていたと考えることが可能となる。

やはり、「体骨柱」の解明と国中連公麻呂の果たした役割の解明が急務となろう。

(5) 甲賀寺三尊仏の移送

天平17年5月5日に聖武天皇は紫香楽を離れた。しかし、それ以降にも正倉院文書には甲賀寺における仏像製作に関する記述がある。

天平17年10月21日の「造甲可寺所解」より仕丁等167人分の公粮の申請がある。つまり、甲賀寺(=甲可寺)においては仏像製作および伽藍の整備が行われていた可能性が高い。ただ、聖武天皇が紫香楽を去った後、甲賀寺の片づけをするために遣わされた仕丁かも知れないとする考え方(肥後1931)は成り立つが、以下の文書により甲賀寺が存続していたことを示すものである。

天平19年正月19日の「甲可寺造仏所牒」には、甲賀寺造仏所で製作途中であった三尊仏を「金光明寺」に移送するための人夫の数や材料の見積もりが記されている。本尊とみられる仏像一体は60人で、二隻の手は1人、螺髪は1人、光背飛天18体は9人、化仏13体は2人、彫花は20人、塔2人である。脇侍ほかについては、菩薩2体は40人、4枚の手は1人、塞蓮華座二揃えは8人、八角木座四居は20人である。菩薩光背は「未造作」であるとする。これらを計164人で運ぶというのだ。移送先は「金光明寺」であるが、東大寺に持ち運ばれたと考えるのが妥当であろう。この文書から、平城還都後約1年7ヶ月経過した時点で甲賀寺において仏像製作が継続していたことが窺われる。ここでつくられた仏像は60人という大人数ではあるが持ち運べる大きさであったことが注目される。ちなみに菩薩の蓮華座は「塞」とされていることから脱活乾漆の方法でつくられていることが判り、脇侍の菩薩の八角台座は「木座」とされており木製であったことが判る。とすると、特に断りの無かった大半は金銅製であったと見なすことが出来るのではないだろうか。問題は、これらの仏像が約2年2ヶ月前の天平16年11月に建てられた体骨柱を元につくられた仏像であるか否かという点と、どの堂舎に安置されるべき仏像であったかという点にある。

東大寺で大仏造営が開始された時点で甲賀寺の本尊である金銅盧舎那仏像の製作が中止され、改めて規模縮小されて造り始められたものがこれであったとする考え方(肥後1931)、甲賀寺の本尊として製作されていたものとする考え方(柴田1991)、金堂以外の堂舎におさめるべく造営当初から製作されていたものとする考え方(中井2002)があるがいかがであろうか。確かに『正倉院文書』に記されているからといっても、全てを示している訳ではないので、いたずらに重要視するのは問題があろう。ただ、ここに記された程度の規模の三尊仏および化仏などを平城還都後の約1年7ヶ月(東大寺の寺地を開く儀式は『東大寺要録』によると天平17年8月23日であるから、それ以降となると約1年5ヶ月となる)未満の期間でほぼ完成の状態にまで仕上げることが出来るのだろうか。体骨柱を建ててから約2年2ヶ月の期間であったとしても容易なことではないように思われる。これらの仏像製作の期間を正確に推し量ることは極めて困難であるが、製作にあたっては急を要したであろうことは想像に難くない。また、これらの三尊仏は現実に移送されたかどうかは明らかではないものの、何が移送される要因となったのかも大きな問題となる。

(6) 瓦の製作年代

内裏野丘陵上の伽藍からは数は多いとはいえないものの、一定量の瓦が採集されている。この瓦は、天平18年9月に恭仁宮が山背国分寺に施入されて以降造営の始まった塔に葺かれたと考えられる瓦との同笵関係が想定され、胎土の状況から信楽で製作さ

れたものであると想定されていた(上原1984)。両者の軒丸・軒平瓦の同笵確認を行ったところ、同笵関係にあり、かつ笵傷の進行状況から内裏野丘陵上の伽藍から採集されるものが先行し、明らかに胎土が異なることが判明した(畑中2002)。これらの瓦当文様は、天平15年に恭仁宮大極殿が造営される際に新調されたと考えられるものをモチーフに作られており、それ以降の年代が与えられるものである。つまり、天平13～15年の恭仁宮大極殿の造営後に作られ、天平18年9月に山背国分寺に施入されて程なく塔が造営されるまでの間に製作されたものであると考えられる。また、平瓦については、内裏野丘陵上の伽藍からの採集資料は殆ど無く様相が明らかではないが、近隣の新宮神社遺跡から出土した瓦には凸面の叩き目を消すという特徴的な資料があり、胎土の特徴から信楽で作られたものと考えられる。これは、恭仁宮大極殿の造営の際に新調された瓦の中にも一定量みられるものである。ちなみに山背国分寺塔にはこの種の平瓦は用いられていない。この様にみてみると、内裏野丘陵上の伽藍で採集される瓦は、山背国分寺との関係を想定できるが、それ以上に恭仁宮大極殿との関係を想定できるといえる。離宮としての紫香楽宮の造営は造離宮司が担当したが、この官司は造宮省の一部を割いて設けられたとされるものであり、甲賀寺についても恭仁宮の造営担当官司の造瓦部門が割かれて甲賀寺の造瓦が行われた可能性も指摘できる。天平17年4月の段階で甲賀寺の造営は「造甲可寺所」が担当したと考えられているが、これも造離宮司と同様に、造宮省を母胎に誕生した可能性が高いとされている(栄原2002)。

以上の点から、瓦自体は、天平13～15年にかけての恭仁宮大極殿造営に続いて甲賀寺の造営にあたって製作されたものとみてよいものとなっている。ただし、内裏野丘陵上の伽藍の発掘調査が行われていないことから、瓦と伽藍との関係は明確にはし得ない点に最大の問題点がある。更には、仮に瓦の製作年代が天平15～17年頃に限定できたとしても、堂舎に葺かれた年代が一致するとは限らない。製作されたものの、葺かれることなくストックされたことも充分に考えられるのだ。つまり、甲賀寺の造営当初から瓦が製作されたものの、堂舎に葺かれたのは、聖武天皇が紫香楽を去ってからであった可能性は否めない。内裏野丘陵上の伽藍の総合的調査が待たれるのである。

(7)　甲賀寺造営過程の問題点

以上に甲賀寺造営過程の問題点について6項目に分けて述べた。何れの項目についても幾つかの選択肢を用意することが出来てしまうのは、大きな理由がある。内裏野丘陵上の伽藍が何時の段階で整備されたものであるのかという点である。つまり、聖武天皇の発願段階の伽藍が如何なるものであったのか、を考古学的に明らかにしなければ選択肢は半永久的に残り続けることになるのである。

5．おわりに

以上、伝甲賀寺(鍛冶屋敷遺跡)出土坩堝の検討、甲賀寺造営過程の問題点の抽出を行った。前者については鍛冶屋敷遺跡から同様の坩堝が出土していないことと、坩堝そのものの検討から、奈良時代に遡るものではない可能性が極めて高いことが理解できた。また、後者については、遺構として確認できる内裏野丘陵上の伽藍が聖武天皇発願の甲賀寺そのものであるのか否かを考古学的に明らかにすることが急務であることを指摘した。

近年紫香楽宮関係の遺跡の発掘調査が進展し数多くの情報がもたらされているが、未だ問題は山積している。今後の目的意識的な発掘調査の進展と、活発な議論を期待したい。

鍛冶屋敷遺跡の発掘調査を共に担当した大道和人氏、資料調査を行うにあたって諸々の便宜を図っていただいた藤﨑高志氏に謝意を表し、稿を結ぶこととする。

(はたなか　えいじ：財団法人滋賀県文化財保護協会)

引用・参考文献

・上原真人『恭仁京跡発掘調査報告書　瓦編』京都府教育委員会　1984
・栄原永遠男「滋賀県信楽町宮町遺跡とその周辺の発掘調査」『古代交通研究』第11号　古代交通研究会　2002
・柴田　実「近江　国分寺」『新修国分寺の研究』第三巻　吉川弘文館　1991

・中井真孝「甲賀宮・甲賀寺と近江国分寺」『日本仏教の形成と展開』法蔵館　2002
・葉賀七三男「るつぼ・とりべ」『金属』1990年11月号　1990
・畑中英二「甲賀寺雑考」『紀要』第14号　滋賀県文化財保護協会　2001
・畑中英二「甲賀寺雑考(続)」『紀要』第15号　滋賀県文化財保護協会　2002
・肥後和男「紫香楽宮阯の研究」『滋賀県史蹟調査報告書』四　滋賀県保勝会　1931
・堀池春峰「金鐘寺私考」『南都仏教』二号　1955
・前田泰次「廬舎那仏鋳造」『新修　国分寺の研究』第一巻　吉川弘文館　1986

編集後記

今年度も、全国の遺跡で数多くの発見が新聞紙上を賑わせました。県内においても、膳所城下町遺跡・鍛冶屋敷遺跡をはじめとして多くの遺跡調査で成果を挙げることができました。そして現地説明会では、多くの考古学ファンや地元の方々に見学していただくことができました。

今号に掲載されている論考は、遺構・遺跡論から保存科学と幅広く、多岐にわたり、今年度の発掘調査に関連する最新情報や成果を反映させたものも含まれています。これらの論考が、埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、我々の仕事である文化財の保護・普及活動の一翼を担っていくものと信じております。

m(_ _)m

平成15年(2003年) 3月

紀 要 第16号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－2
電話 (077)548－9780・9781
FAX (077)543－1525
URL http://www.shiga-bunkazai.jp/
E-mail mail@shiga-bunkzai.jp

印刷・製本 ㈱スマイ印刷工業
栗東市川辺568番地2
TEL 077-552-1045